

此賊逃無處

此の賊 逃るるに処なし

観音念一廻

観音 念ずること一廻

通釈

・人間が生きて行く上で逃れられないものの一つに「老い」がある。若き日の活力は老いととも削り取られ、これに追いうちをかけるように「病」が私に襲ってきた。

・又、身体の衰えのみならず、精神も此の大宰府の謫居生活とともに衰耗し、愁いが深まるばかりである。

・そして今、私に追っているものは「死」の賊である。この賊は先の「老」「衰」とともに絶対に逃れることの出来ぬものである。

・今は、専ら観音菩薩にすがって、浄土往來の一道に向かえることを念ずるのみである。

この詩内容の詳細については既に本書、第一部で詳述したが、ここで一部を再掲してみる。

三句目で「此の賊 逃るるに処なし」と自分の死期の迫ったことを悟っている道真には、四句目で「観音 念ずること一廻」と浄土往來をひたすら、庶幾う自分を描き筆を置く。そこには仏の道でしか生かされない、救済の道が残されていない今の自分の姿に対する諦念が色濃く反映している。「1・太宰府謫居一期」「2・太宰府謫居二期」に見られる作品群とは全く異質の詩風の作品となっている。ここに、この期の作品の特質を見事に凝縮したものを考える思いがする。筆者はこの作品こそが、残されている『菅家後集』の全作品の、辞世の作ではないかと推測している。と同時に、「514 謫居春雪」は既に二章で論じた所だが、詩風からすれば筆者の分類した「2・